

悩む、考える、まとめる

日本画を学ぶ大学生の考えること

Artist

河合 桃子 KAWAI Momoko

芸術専門学群
美術専攻 2年

X

Writer

小池 ちはる KOIKE Chiharu

人文・文化学群
比較文化学類 2年

大学で学んでどういうことだろう。大学で美術を学んでどういうことだろう。筑波大学の芸術専門学群の学生は美術を専攻し、自ら制作も行っている。他学類の学生とはちょっと違うことをやっているように思える。制作もしているなんてすごい！しかし、私たちは同じ大学にいる。彼らは普段どうしているのを考えているのだろうか。大学で学ぶという経験をどう受け止め、吸収しているのだろうか。そんな疑問を抱いていた私が出会ったのは、日本画を学ぶ2年生の河合桃子さん。初めて会ったときに、日本画の知識や技術について語るのではなく、自分の考えを話してくれた河合さんに惹かれて取材をお願いした。大学で日本画を学びながら何を考えているのですか！？

日本画ってなに？

「明治以降にヨーロッパから入った西洋画に対し、日本在来の技法・様式に基づいて明治時代に創出された絵画を指す語。墨や岩絵具を主として、若干の有機色料を併せ用い、絹・紙などに毛筆で描く。」広辞苑（新村出編、第六版、岩波書店、2008年）の「日本画」の項目。辞書にはこうあるが、日本画の定義に



日本画を描くときに使う絵具。水に溶かして使用。

ついてはそれを専攻している学生も考えることらしい。岩絵具で描くのは主流だが、それが決定的な違いというわけでもない。西洋的なモチーフを描いている作品もある。だから描く対象で決まるものでもない。描いた人がそれを日本画と言えばそれは日本画になるの？日本画っていったい何なの？「大学でなにをやっているの？」と聞かれたときにうまく説明するのが大変だということが河合さんに初めて聞いた話だ。

日本画をやっているのですね！ところで日本画って何ですか？そう聞けばすらすらと答えが返ってくるものだと勝手に思い込んでいた私は、河合さんの話を聞いて、はっとした。制作を行う芸術専門学群の学生も自分のやっていることをうまく説明することは困難なのだ。

日本画を学ぶ大学2年生

日本画を学ぶ大学2年生は何をしているのだろうか。

芸術専門学群で日本画コースを目指す2年生は共用のアトリエをもつ。彼らは課題として課される作品であれ、自主制作の作品であれ、普段から制作をしている。時には家に作品を持ち帰って描くこともあるが、たいていは皆同じ部屋で制



日本画を描くときに使う道具

作活動をしているそうだ。思い思いに制作はするが、行き詰まったときはほかの人の様子を見たり、みんなでおしゃべりをしたりする。また、技術的なことで質問があれば、大学院生や先生の部屋を訪ねて絵を見たり、話を聞いたりする。

授業は絵画の授業だけでなく、平面と立体のデザインの授業や彫塑、版画も学ぶ。講義形式の授業では美術論や美術史を学ぶらしい。

専攻を同じとする仲間と制作をし、幅広いことを学ぶ。それが日本画を学ぶ大学2年生だ。

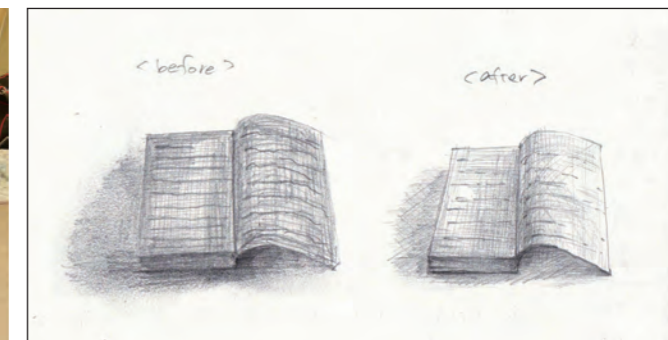
芸術を学ぶ、大学で学ぶ

芸術とは何かを表現すること。表現するという行為はオリジナリティが求められるように思える。そのような行為を教わるとはということか。そして、大学には先生がいる。芸術を専攻する学生は何を教わり、学ぶのだろう。河合さんの話のいくつかから読み取れたことがある。先生は技術を手取り足取り教えてくれる存在ではなく、学生が自分で何かを考えるきっかけを与えてくれる存在なのかもしれないということだ。大学で芸術を学ぶということは、芸術をきっかけとして様々なことを考え、自分のなかでまとめていくということだろうか。

日本画とは何か、という話をしているときに、「わたしは大学から日本画を本格的に始めたし、大学の先生は自分の考えを押し付けたりはしないから、日本画とはこういうもの！という絶対的な考えはもっていない（だから曖昧で困っているのだけれど…（笑）」と河合さんは話していた。それは押しつけられた枠組みが



アトリエでの制作



まじめな（説明的な）絵（左）とそうでない絵（右）

左は「本は四角い」ということを意識が強く、線影がきっちり網戸のよう。文も実際は反射で見えないところも補って書いてしまっている。右はどうしたらそれらしく見えるかということを意識。光のコントラストを表現するために線影は斜めにも引き、白とびで見えない文章はそのままに。

ないということだと思うけど、それはよかった？そう聞くと、確かに自由でいいけれど、教えられたことを基礎として自分の考えを展開していくのが好きだから、きっちり指導されていたら今は違う描き方をしているかもしれない…そう考えると少し惜しい気もする、と答えてくれた。

河合さんは、デッサンは受験期に美術の予備校等で基礎から教えてもらい、枚数を描くことも求められた。その時のことを今思うと、半強制的に課題を課されることでやりたくないこともやるので、考える幅が広がった。好きでないものに対してなぜ好きでないのかが分かるようになった、と話してくれた。

自身の経験からきちんと教えられることも、先入観なしに自分で模索していくことも大事なのは、という河合さんの話はとても印象的だった。

「表面的でない美しさを描きたい」。話している間に河合さんがよく言っていた言葉だ。そんな気持ちをもつきっかけとなったのが先生の一言だったという。

「きれいなものを絵にしてもつまらない」。あるとき河合さんは大学の先生からこんなことを言われた。きれいなもの一みずみずしく咲き誇る花や生命力あふれる若さーを描くだけで終わらせるのではなく、もっと内面的な美しさを描けてこと？先生の言葉の真意はわからないが、河合さんはそう受け取った。

「ここでいう、“きれい”なものを絵にするというのは、万人受けする、華やかだったり癒されたりする絵を描くということ。誰が見てもきれいだと思うものをしっかりときれいに描く。ときには理想的で非現実的とも言えるもの。一方、

一般的には“きれい”ではないものとは、例えば、枯れた草花やしわしわのお年寄りのこと。そして、それらを“きれい”に描くというのは、それらがもつ経験なども汲み取って内面から出てくる魅力表現ということ。表面を描く絵画においてそういう内面的なものを表現することは難しいけれど、先生のいう“つまらない”くないというのはこういうことができることってこと？」

先生の言葉から自分で考えて河合さんは、「表面的でない美しさを描きたい。その対象を絵に描いたのがその人だからそれが魅力的に見える、ということをやりたい。ありきたりなものではなく、自分独自の視点を含んだものを描きたい」と思うようになった。

まじめだね。河合さんはよくそう言われてきたという。

この言葉を最初は褒め言葉として受け取っていた。努力を認められているのだと。しかし次第に「まじめでいいんだけどね…」の「…」に面白みがない、というニュアンスが含まれているのではないかと、「まじめ」と言われることがコンプレックスになっていった。

まじめってどういうことだろう。それに答えのようなものが見つかったのが大学1年生の冬だった。その時は石膏デッサンの課題だったらしいが、河合さんは絵を描きながら自分の考える真面目な絵とそうでない絵を説明してくれた。

「たとえば、机の上に置いてある本をデッサンするとき、普通は本の背表紙のラインと並行な線と垂直な線を引くでしょ。それは私たちが本というものを知っているから、そのような

方向に流れがあるのが普通だからこういう線を引こう、と考えてしまっているからで、でも、実際は斜めに光が当たっていることもあるし、斜めに線を引いたっておかしくない。むしろ、感じたように描いたら垂直に交わった線だけがあることはありえない」（図参照）

「描こうとするものを知っていることで、ある意味ゆがんだ見方になってしまっている。宇宙人になったつもりで見たものをそのまま描く。今までの描き方は常識的な線しかなく、説明的だったのかもしれない。説明的ではなくて、あっ、そうくる！？という驚きがある絵が『まじめでいいんだけどね…』と言われない絵ということかな」

このことを考えるきっかけは周りの人の言葉だったが、これは河合さんが悩み、考え、たどり着いたことのように思えた。

大学で芸術を実践的に学んでいる学生もさまざまなことを考えている。河合さんと話して、そのことがわかった。当たり前のことかもしれないが、とてもおもしろい。芸術専門学群生の哲学を聞いたような気分だった。